

阪神国際港湾

コンパス試験運用

ゲート前混雑状況可視化

実入りコンテナ搬出 規模拡大

阪神国際港湾（外園賢治社長、神戸市中央区）は23日から9月3日にかけて、近畿地方整備局などとICT（情報通信技術）を活用した海上コンテナの搬出入予約システム「CONPAS（コンパス）」の2回目となる試験運用を、神戸湾のPCR18上組コンテナターミナルで実施している。初回から規模を拡大し、GPS（全地球測位システム）を用いたリアルタイムの車両位置情報表示によるゲート前渋滞状況の可視化を新たに実証する。

（根来冬太）

8月23日、報道関係者に試験運用の様子を公開した。前回は1日のみの実施で、空コンテナを使用した。今回は2週間かけ、実入りの営業コンテナの搬出を行う。参加する事業者数

も増加。海運貨物取扱業者が1社から5社へ、海上コンテナ輸送事業者は2社から10社へ、運行車両は3台から27台になっている。また、事前予約枠の登録、ハンディー端末によるPS



ハンディー端末によりPSカードを受け付け（一部画像処理）

カード受け付け、出入管理情報システムとの連携、コンパス専用携帯端末への行先表示に加え、GPSにより車両の位置情報を可視化し、ゲート前の混雑状況が分かるようにする。

コンテナターミナルを上方から撮影した映像に、GPSによって常に更新される移動するマーカーで車両の位置を表示することで、海運貨物取扱業者、海コン事業者配車係、ターミナル事業者は渋滞状況を把握できる。また、海コン事業者の配車系の画面からは、自社

車両の通し番号や積載するコンテナ番号、ドライバーの名前といった情報を見ることが出来る。ターミナル事業者は、RTG（タイヤ式門型クレーン）オペレーターが事前荷役を行うため、ゲート前の全ての車両のコンテナ番号が確認可能だ。